

平成 24 年度 8020 公募研究報告書抄録

研究課題：周術期患者における手術後の継続的な歯科の介入が全身状態に及ぼす影響

研究者名：森田 学¹⁾、曾我賢彦²⁾、山中玲子²⁾、丸山貴之¹⁾、村田尚道³⁾

所属：¹⁾岡山大学大学院医歯薬学総合研究科予防歯科学分野

²⁾岡山大学病院医療支援歯科治療部

³⁾岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センター

【目的】

周術期において、少ない在院日数で高度な医療を円滑に進める上で、誤嚥性肺炎や発熱、創部感染などの合併症の予防など、全身管理は重要である。過去の報告において、抵抗力が減弱している手術患者への口腔ケアが全身状態の維持に有効であることがいわれている。急性期医療を展開する岡山大学病院では周術期管理センターが設立され、歯科部門においても術前から術後にわたる継続的な介入を行っている。しかし、こういった継続的な介入が患者の全身状態にどのような変化をもたらしているのかについては、詳細な検討はなされていない。本研究では、手術後の継続的な歯科の介入が全身状態の回復にどのような貢献をもたらしているのかについて検討した。

【対象と方法】

岡山大学病院周術期管理センターを受診した呼吸器・食道外科手術患者のうち、同センター歯科部門を受診した 10 名を対象に、術前から術後にわたる継続した口腔ケア、嚥下機能訓練を行った。また、歯科の指標として、歯の状態・歯周状態・口腔清掃状態、口腔内細菌、および嚥下機能を、全身状態として、体温、白血球数、および C 反応性タンパク量を評価し、これらの関連について検討した。

【結果と考察】

手術後の患者 10 名中 2 名に *Haemophilus influenzae* を、1 名に *Streptococcus pneumoniae* の検出を認めたものの、他の患者において日和見感染菌の検出は認められなかった。また、細菌性肺炎は認められなかった。このことから、手術の侵襲により免疫機能の低下が起きていると推測できるが、継続した歯科の介入によって術後の検出菌種をある程度抑えることができていると考えられる。しかし、白血球数や CRP 値、発熱日数の割合といった全身状態との関連までは見出すことができなかった。本研究の対象者はいずれも口腔内状態、清掃状態、嚥下機能が比較的良好であったため、口腔ケアの効果が現れにくい者であったかもしれない。歯科の積極的な介入により、術直前の歯口清掃・粘膜清掃時において、患者は口腔内に対する関心が高まっており、口腔内のセルフケアがほぼ確立されているものと推測される。しかし、本研究では術後翌日から継続した口腔ケアを行っているにもかかわらず、日和見感染菌の検出を認めている。これは、手術の侵襲による全身状態の低下によるものが大きいと考えられるが、日和見感染菌の発生を抑えるための口腔ケアのより効果的な方法についても検討が必要であると思われる。